

母に対峙する娘のまなざし

中野 理恵

中年女性がぶっきらぼうな表情で、左手に握った白い携帯電話を上下に振りながら、ショートパンツからはみ出た足を真っすぐ伸ばして、ソファにぞんざいに座っている。身体に比べると両足が大きく見え、少し上を向いた2つの鼻の穴が印象に残る。「私が結婚したらどうする」と、母に向けてカメラを回しているだろう娘から問われると「1人で暮らす」「プロポーズされたか」と応じる目はうれしそうだが、すぐに再び、ぶっきらぼうな表情に戻る。「1人で暮らす」「公園で寝る」と応じる母の短い返事は脅しとは思えない。この緊張した母娘の対話で始まる『日常対話』は、同性愛者の母アヌと向き合う、実の娘であり本作の監督ホアン・ファイチェン（チェン）が、母に対峙し、自分と母との関係をとらえ返す2016年製作の台湾のドキュメンタリー映画である。

子どもは親との葛藤を経て大人になっていく。だが、本作の母子関係は少し異なっている。「母がそばにいたり、母から構って貰った記憶がない」「母の記憶といえば、母がいないことだ」「いつも彼女のところにいた」「母に聞きたい。どうして自分たちは他人同士のようなのか」とチェンは語る。それに対して母は「言わない方がいい、話しても意味がない。誰も聞きたがらない」と言葉少なに応じるのだ。

母親の職業は中国式の葬儀の際に、着飾り楽器を吹いたりしながら〈賑やかし〉を演じる葬式陣頭〈牽亡歌陣〉で、その仕事を手伝うためチェンは小学校を2年で中退していた。酒乱でDVのチェンの父から逃れるために母がチェンの妹と3人で家を出たこと。父から性虐待を受けていたことを母に伝えるチェン。しかもそれを母は知っていたのかも…。当の父親は後に自殺していたこと等が次



© Hui-Chen Huang All Rights Reserved.

第に明らかになる。また、母の好きになった女性たちへのインタビューからは、こまめで明るくて気前のいい母の一面を知る。

見終わって数日間、母の表情や食卓で会話する母子の様子が蘇ることもあり、正直なところ重すぎて言葉にするまでに時間がかかった。力作である。誰が撮影したのかが気になったのだが、クレジットで確認すると監督自身だった。据え付けのカメラで自らも晒して制作したと知るとき、監督自身の覚悟の強さと深さ、そこに至るまでの苦しみはいかばかりか、と考え込んでしまった。

だが、見た後、何とも言えない充足感に充たされたことも事実である。同時に自分の過去や娘との緊張関係が、映像を通して広く人々の目に触れた事実を知った母アヌが、それに対してどのような感想を抱き、現在、母子関係がどうなっているのかを知りたい、とも思った。母子ともに呪縛から解放されていて欲しい、と願う。

なお、本作は、完成後、2017年ベルリン国際映画祭パノラマ部門テディ賞、台北映画祭最優秀ドキュメンタリー賞等多数を受賞し、同年のアカデミー賞外国語映画賞台湾代表作に選ばれ高い評価を受けている。

《Cinema Information》

『日常対話』

台湾映画(88分) / 監督: ホアン・ファイチェン / 公開中

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。